

水の源

MIZU NO MINAMOTO

2020

49

Winter



全国水源の里
フォトコンテスト結果発表

インタビュー

水源の里へ思いを馳せる

相手の魂を撮る

相手を理解し、かつ感動を表現する

写真家 田沼 武能さん

ウォークルポ

生きる手応えを求めて農村へ

～緑のふるさと協力隊という人生の選択肢～

高知県土佐郡大川村

ウォークルポ

地方で実現したオンラインイベント

～企業との連携で奏功～

岐阜県飛騨市

首長リレー連載

島根県飯南町

山碕英樹町長

水源の里のうまいもん

柿巻きゆべし

長野県下伊那郡泰阜村

全国水源の里 フォトコンテスト

過去最大975点の応募。

グランプリは「春の恵み」(黒木丸生さん)に決定。

新型コロナウイルスの影響により、感染症対策に十分配慮しながら実施した今回の全国水源の里フォトコンテスト。今年も応募点数は過去最高を更新し975点、359人にご応募いただきました。どの作品もレベルが高く(田沼審査員談)、審査も長時間に。結果、入賞作は過去のグランプリ受賞者や入賞者が多数入選しました。

今回の『水の源』では田沼審査委員長へのインタビュー(P6、7)を掲載し、コンテストの感想などをお聴きましたので、あわせてご覧ください。



作品を選考する二人の審査員

審査員

たぬまたけよし
田沼武能
(一般社団法人日本写真著作権協会会長)

わしだきよかず
鷺田清一
(哲学者)



表紙写真



『春の恵み』

撮影地: 山口県下関市
黒木丸生さん
(山口県下関市)

【講評・田沼】 毎年3月の早朝15分だけ許可になる青ノリの収穫光景を作品に捉えています。腰まで水に浸かり収穫に懸命になる表情がクローズアップされています。ことに小さく写っている顔の表情の真剣さ、竿の先につく青ノリのしぶきに躍動を感じます。背景が黒くつぶれているので主役の行動が一層強く表現できています。その暗部の黒が人工的すぎるという説もありましたが、迫力あるグランプリ作品です。



『燃える男達』 撮影地: 愛媛県西予市
白石信夫さん(愛媛県宇和島市)

【講評・田沼】 火を焚いて神を祀る行事は全国各地にあります。正月や盆に多く、京都では鞍馬の祭りが有名です。作品は、愛媛県は宇和島・賀茂神社の秋祭りの前日に行われる潮垢離の火祭りで捉えたもの。男子が焚き火の間を走りぬけ、海に飛び込み妖怪「牛鬼」を担ぎ上げます。火の粉を浴びながら禪姿で走りぬける勇壮な光景がスナップされています。水と火は切っても切れない関係。火の間をぬける禪の男たちが主役ですが、その背景に水が感じられます。



『丸山千枚田の田植え』 撮影地: 三重県熊野市
堅山勝英さん(大阪府大東市)

【講評・田沼】 日本には千枚田と名乗る棚田はいくつかあります。棚田は生産効率としてはよくありませんが、日本の農村風景としてはなくてはならないものです。丸山の千枚田も山間に展開する田園風景の一つです。あぜ道に生える草が田圃に輪郭を象り、不定形の図形を作ります。その中で田植えをする3人の農夫たち。この作品から日本ならではの、美しいのどかな農村の風景を見る人に感じさせます。水源の里を表現した素敵な作品です。



『水と人の素敵な絶景』 撮影地:群馬県みなかみ町
佐藤 里英 さん (群馬県高崎市)

【講評・田沼】 写真はチャンスとの出会いで決まると思います。ことにスナップ撮影はそう感じます。作者は旅行中にたまたまバンジージャンプをする大学生と出会い、大学生に許可を得て撮影したそうです。5人いた中の1人がバンジージャンプをしながらカメラに手をひろげ笑顔を見せてくれました。すぐさまシャッターを切り、チャンスをものにしたと作者は言います。背景に入るボートも出会いのチャンスであったそうです。秀逸な作品が撮れた原点は作者の好奇心と行動力にあったと思います。素晴らしいスナップ作品です。



特選 『少年の夏』 撮影地:徳島県神山町
志摩 時次 さん (徳島県石井町)



特選 『至福の時』 撮影地:山形県飯豊町
岩谷 秀夫 さん (山形県南陽市)



特選 『田植の頃』 撮影地:東京都日の出町
宮森 義雄 さん (東京都東村山市)



特選 『黄金の朝』 撮影地:福島県北塩原村
浅野 良 さん (福島県福島市)



特選 『ルリボンヤンマの産卵』
撮影地:長野県南牧村
土田 陽介 さん (群馬県前橋市)



特選 『ツリークライミングは楽しいな』
撮影地:京都府京丹波町
白木 文枝 さん (京都府福知山市)



特選 『島をめざして』
撮影地:高知県中土佐町
西岡 季子 さん (高知県高知市)



特選 『どろんこパフォーマンス』
撮影地:宮城県美里町
庄子 源六 さん (宮城県仙台市)



特選 『おたまじゃくし みいつけた!』
撮影地:兵庫県丹波篠山市
西村 俊裕 さん (兵庫県三田市)



特選 『棚田に降るなごり雪』
撮影地:福島県喜多方市
大島 市郎 さん (福島県会津若松市)

相手の魂を撮る

相手を理解し、かつ感動を表現する

たけよし
写真家 田沼武能さん

——田沼先生の写真との出会いは？

実は僕は写真館の倅なんです。いわば門前の小僧。だから小さいときから写真は身近な存在でした。しかし写真家になる気はさらさらなくて、中学を卒業するころまでは建築家を目指していました。中学卒業後は早稲田大学の建築科で学ぶため第1高等学院を受験したんです。結果は落っこちた。理由は、当時中学校にいた軍事教官と喧嘩して「卒業させない」と言われた。そこを母親が毎日学校に通って頭を下げて、許しを乞うたんです。そして「軍人勅諭」を毛筆で書けと言われ、できれば卒業だと。毛筆でこんなに分厚い本を3冊も書くんです。夜に書くでしょ。だんだん眠くなる。すると最後のほうになって間違える。毛筆だから消せない。また最初から書き直す。まあ、とにかく大変な思いをして卒業させてもらったんですよ。

1年浪人してもう一回受験したけど、また落っこちた。その時理由が分かった。試験の結果と内申書で合否が決まるのだが、内申書は学校にいた当時のままの評価が受験の都度用いられる。だから何回受けても結果は同

profile

田沼武能さん

1929年、東京・浅草生まれ。49年に東京写真工業専門学校(東京工芸大学の前身)を卒業後、日本近代写真の大家・木村伊兵衛に師事する。65年には当時一世を風靡した米国の写真誌「LIFE」と契約。ライフワークとして世界の子どもた

ちや武蔵野などを撮影する。90年紫綬褒章、2003年文化功労者。1995年から2015年まで日本写真家協会会長を務める。2019年には写真界では初の文化勲章を受章。写真集に『武蔵野讃歌』『トットちゃん』と地球っ子たち』『時代を刻んだ貌』など多数。

じということに気がついたのです。そんなこと言っちゃ怒られますが…とりあえず、写真の学校に入れて友人に勧められて行くことになった。それでも建築家の夢は捨てられなかった。1年間は二足のわらじで頑張ってみたものの、だんだん建築の勉強から遠のいてしまった。写真の学校も2年目になって「このまま、どっちつかずをやっていたんじゃろくな人間にならない」と考え写真の道で生きていく決断をしたんです。

——水の源の理念への共感？

そもそも、水の源の話は京都の写真家で今は亡くなられた井上隆雄さんが「一緒にやってくれないか」と言ってきた。それでお手伝いすることになり、そののち井上さんが健康上の理由で一時休まれたことがあったが二人で続けてきました。

とにかく日本人は甘いところがある。水というのは人間にとって代えがたく重要で大切なものです。ある国の人が水源地の土地を買いあさった時代があった。それを聞いて、かなり危惧した。水源を買いとられると水利権を握られコントロールできなくなる。日本人でありながら日本の国土にある水利権を他の国から買わなければいけない。水に関する利権は、日本の国や公共機関で管理しないと大変なことになると思っていた時にお話をいただいた。だから一も二もなく賛同させていただいた。日本人が日本の国土にいながら外国人に水利権を払わなければいけなくなる。そんな社会が到来したらそれこそ由々しき事態。なんとかしてそんな日本にならないように微力ながらお手伝いをしたいと思って水の源の活動に参画させていただくこととなった。

——12回目を迎えたフォトコンテストの評価は？

継続は力なりという言葉がありますが、コンテストに関してもそのとおり。長年の取り組みが徐々に浸透していき、今回12回を迎えて過去最大の応募点数を確保できた背景だと思います。フォトコンテストは、水源の里の本来の活動からすれば伴奏曲のようなもの。僕たちが現場で何かをするのではないけれど、多くの人々にこの

取り組みを知ってもらうということが大切だと思っています。

——「写す」ということ

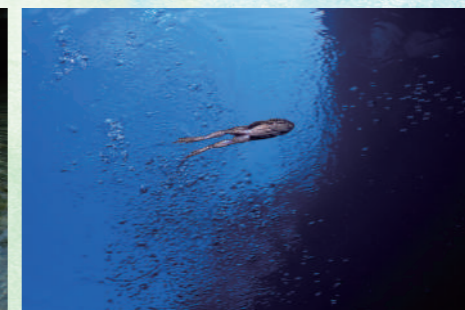
写真というのはシャッターを切れば写る。だけど写ったものが違うということに気が付くまでに時間がかかる。写っただけでみんな安心する。だけど、「写った」というのと「写す」ということは違うと僕は思っている。「写す」ということは、相手を理解しなければできない。そのためにはいろんなことを知らなきゃいけない。それでなおかつ何かに感動してその感動を写真に表現していくことが大切。相手の魂を写すような意気込みで撮って欲しいと申し上げています。

——心に残った作品とコンテストの今後

一時期、僕が審査しているということで子どもの写真が多かった。僕が審査していると子どもの写真が通ると思って応募してきていたんでしょう。そう考えている人が多かったと思います。しかし必ずしもそうではない。水と人間との触れ合いがそこに写っていないといけいない。最近は小さな動物が被写体になる作品が増えている。が所詮、水がないと人間を含めて生物は生きていくことはできない。ですから、そういうものを表現した作品が心に残っていく。去年カエルが泳いでいる写真がグランプリになったら、今年はカエルばかり出てくる(笑)。去年カエルが良かったからといって似たような作品ばかりを出してくる。でもそれは逆なんですよ。

僕の記憶に強く残っている作品は、水と人間の関わりが深いものが多い。それと作画的に作った写真はよくない。一昨年のグランプリで子どもが顔を川面に付けて川底を覗いている写真がありました。あの写真は、子どもの感性を感じながら撮っている。だから見る人に「かわいいな」とか「素敵だなあ」とか、そういう感情が湧いてくるんですよ。そういう作品が良い作品なんです。来年はぜひ1000点を超えて、ますますこのコンテストが盛り上がっていくことに期待しています。

【聞き手・永井 晃】



左/第10回グランプリ
「清流の天精」
右/第11回グランプリ
「蛙の川流れ」

生きる手応えを 求めて農村へ

～緑のふるさと協力隊という 人生の選択肢～



おおかわむら
大川村 高知県土佐郡

自分が本当にやりたいことは何だろう、何のために働いているんだろう…そんな漠然とした空虚な思いを抱いたことのある学生や社会人は少なくないだろう。そんなモヤモヤに立ち止まり、後の生き方を考える1年間を農村で過ごす「緑のふるさと協力隊」。今回は、この制度がもたらす“きっかけの1年”についてレポートする。

日本一人口が少ない村へ

緑のふるさと協力隊を運営する地球緑化センターの紹介で訪れたのは高知県・大川村。深い山間を流れる吉野川の清流。紅葉に彩られ

た山々の切り立った斜面に目を凝らすと、ポツポツと民家らしきが見える。「美しき秘境」それが大川村の第一印象だった。

目的地の村役場はすぐに分かった。道沿いのそこにしか、まとまっ

た建物を見つけられなかったからだ。それもそのはず、ここ大川村の人口は400人足らず。離島を除けば日本で最も少ない。平成の大合併を拒み、自立の道を選んだ日本一小さい村では、ここ数年、緑のふ



山中農園でのユリの出荷作業



切り立った岩壁に100mを誇る「小金滝」。紅葉が美しい大川村の名所



緑のふるさと協力隊の山田隊員(左)と大川村役場の矢野さん

るさと協力隊や「地域おこし協力隊」などの制度を活用し、若者の移住や地域活性化に目覚ましい成果を上げているという。緑のふるさと協力隊の受け入れも今年で7年目となる。

取材対応で迎えてくれたのは、村役場むらづくり推進課の矢野浩之さんと、緑のふるさと協力隊員の山田朋広さん。同協力隊受け入れの経緯について、矢野さんは「現在、村の人口は400人を切り、16ある集落は住民が1～2人のところもあります。集落としての機能を維持していくためには、地域に入って一緒に課題解決に取り組んでくれる人材が必須。そこでこの制度の活用を始めました」と話す。制度をきっかけに、村に若者が流入して地域が活気づき、協力隊も地域も一緒になって成長していくという取り組みのようだ。

農村サバイバル生活!?

緑のふるさと協力隊をごく簡単に表現すると、若者の長期農村活動プログラム。応募すると全国各地の自治体に派遣され、1年間の任期で様々な体験をする。例えば、米や野菜づくり、花卉栽培、牛や豚などの世話、マグロ漁、カキ漁といった地域産業の手伝いから、祭りや青年団の活動、伝統食づくりや特産品開発、お年寄りのサロン訪問、学校行事への参加などなど、地域の“よろず”ニーズに応えながら、農村での生活がまるごと体験できる制度である。

同じ協力隊でよく比較される地域おこし協力隊との大きな違いは“報酬”。制度から支給されるのは、月5万円の生活費のみ。住宅や車、光熱水費などは受け入れ自治体が負担してくれるが、決して余裕の

ある金額ではないだろう。それだけ聞くと、以前TV番組の企画で人気を博した「1カ月〇〇円生活」のようなサバイバル生活が頭に浮かぶ。しかも、ざっくりとした活動趣向とのマッチングによって、どこに派遣されるか分からないという。何かと不安も多い気がするが、この制度の魅力は一体何だろうか…。

自分が求められる喜び

山田さんは静岡県出身。大学卒業後は東京の機械メーカーで開発などの技術畑も担当したが、キャリアとは裏腹に「自分の仕事がだれの役に立ち、だれの喜びにつながっているのか。今の生活のままでいいのか」、そんなモヤモヤした感情が膨らみ出したという。自然に溶け込みながら自分らしくワクワクする生き方を模索する中で次



村の中央を流れる吉野川により、地域は南北に二分されている



茶摘みの様子



芝桜の挿し木作業

第に、自給自足、マルチワーク、半農半X、などへの関心が高まっていった。そして昨年6月、『ナリワイをつくる』の著者が主催する岩手県でのワークショップに参加した際、宿泊した宿のオーナーから「緑のふるさと協力隊」制度を紹介される。オーナー自身が同協力隊のOGだったのだ。

思案を重ねた結果、応募を決意した。希望体験は、農業、畜産、環境保全。そこで派遣された先が大川村だった。もちろん初めて訪れる地で、知り合いも一人もいない。不安と期待が入り混じる中、4月から1年間の活動がスタートした。

今年には新型コロナ禍で一堂に会する活動は制約されているが、小さい集まりで徐々に地域の人々とつながり、半年たってだいぶなじんできたという山田さん。「村民は、緑のふるさと協力隊をとにかく温かく受け入れてくれます。地域おこし協力隊と違い、報酬に対する対価の労働ではないという



山田隊員おすすめ！大川村特産の「土佐はちきん地鶏」を使った親子丼

ハードルの低さもあるかもしれませんが、ほんの些細な手伝いの一つひとつに“ありがとう”と感謝されます。自分が必要とされ、自分の存在が求められる、というのは何ものにも代えがたい喜びです」と話す。コンビニもファミレスもない生活も慣れればそれが普通になり、特に不便と感じることもなくなったそうだ。そもそもこの村での生活を楽しむのに、都会の価値基準はそぐわないのかもしれない。

400分の1の存在意義

大川村の人を評して、「とにかく皆パワフル！」と山田さんは言う。高齢化率40%以上の村だが、お年寄りほど地域のために精神的に動き、驚くほど元気なのだそう。そんな背中をみて、青年団も負けじと団結を深める。村を支える人口が



大川村第1号の緑のふるさと協力隊員・和田さん。現在は村議として活躍する。昨年、日本を代表するビジョンや才能を持った30歳未満の30人表彰する「30UNDER JAPAN2019」にも選出された



児童センターでの絵本読み聞かせ



村民運動会でも大活躍

少ない分、1人の力や存在価値がとても大きい。だから村の課題に対して、だれも手を抜けないし、他人任せにできない。この村にやってきた隊員は、皆一様にそのことを体感する。

大川村の第1期緑のふるさと協力隊員で、現在は村議会議員を務めている和田将之さんもその1人。協力隊から村民として村を支える立場となった和田さんに、村や協力隊制度について話をうかがった。「ここでは、小さな取り組みでも地域が少しずつ変わっていき、それが村民のためになることが日々実感できる。緑のふるさと協力隊は、自分の存在意義を感じるきっかけになるととても重要な制度。自分の経験を生かして、隊員が活動しやすいようサポートしていきたい。そして、この

村で一緒に頑張っていける仲間を増やしたい」と話す。



ユリ農家の山中さん(左)は、村での頼れる兄貴的存在



標高900mの高地を活かして、ユリの栽培を行う。低温を活かして年3回収穫、出荷しているそうだ

村で一緒に頑張っていける仲間を増やしたい」と話す。

実際、村での生活の困り事や悩みを相談したり地域の様々な橋渡しをしてくれたりする和田さんがいるおかげでとても活動がしやすい、と山田隊員も感謝していた。和田さんは今や、村のつながりの中で生きていく喜びを取り次ぐ“伝道師”となっている。

きっかけの1年から見たもの

役場で話を聴いた後、山田隊員の活動について、村でユリ栽培をしている山中農園にうかがった。この日はここで、ユリの出荷作業を手伝うという。オーナーの山中教夫さんは「山田さんをはじめ、協力隊の方々の助けは非常にありがたい。毎年、どんな若者が来てくれるか楽しみにしています。山田さんが村に残ってくれたら、うれしいですね」とニコリ笑いかける。作業場には和気あいあいとし

た空気が流れ、農園の皆さんと山田隊員との良好な関係が窺える。作業も手慣れたものだ。

任期1年の3分の2が経過した山田さんに、今後について尋ねてみた。すると迷いなく「私個人としては引き続き、大川村に残りたいですね」という答えが返ってきた。そして「最近では定住を視野に入れた活動もしています。勉強からのスタートなのですが、ここでパンづくりをして個人販売をしたいんです。僕、パンが好きなんですけど、村にパン屋さんないんですよ〜(笑)」と言う。

農村で過ごす1年は、立ち止まって自分の生き方を考えるのに絶妙な期間のようだ。田舎が肌に合わなくてもいい経験となり、そこで何かを見つければ速やかに次のステップへ踏み出せる。そんな“きっかけの1年”が、いろんな形で隊員のこれからの人生につながっていく。山田元隊員の作る温かくて美

味しいパンが、現在の活動とともに村の人たちを喜ばせる日も遠くないだろう。

【文・白波瀬聡美】



村の農産物加工品の販売などを行う「結いの里」。山田さんもゆくゆくはここで、手作りパンの販売を行いたいそう



大川村役場

大川村はこんなまち



大川村は高知県の北にそびえる四国山脈の懐に抱かれ、雄大な山々や吉野川に水を育む清流など豊かな自然環境に恵まれた村。人口は396人(平成27年度国勢調査)と離島を除いては国内最少であるが、村全体で地域活性化に取り組んでいる。主な地場産品は、高品質で希少な肉用牛として名高い大川黒牛と、新品種で高知県を代表する地鶏である土佐はちきん地鶏。近年は、愛媛県西条市をはじめとする四国西部エリアや近隣の嶺北地域との広域連携の中で、早明浦ダム湖面を活用したウォーターアクティビティや周辺を巡るサイクリング等の新しい取り組みも進めている。

緑のふるさと協力隊とは

「緑のふるさと協力隊」は、農山村やそこの暮らしに関心を持つ若者を、地域に1年間派遣するプログラム。参加する若者にスキルや経験は求めず農山村の人々とおおいに関わって暮らしながら、多種多様な活動に取り組みます。

活動を終えた隊員の約4割はその地に定住し、活動で養われた地域を見る視点や経験から、社会に求められる存在として活躍の幅が広がっています。

地球緑化センター 山岸貴生さんにお話をうかがいました。

■どのような思いでこの緑のふるさと協力隊の制度はスタートしましたか。

農山村と都市の若者を結び相互の交流を図ります。これからの社会を担う若者たちが、様々な地域貢献活動(ボランティア活動)を行うことで、自身の生き方や働き方を考える機会につなげてほしい。その思いのもと1994年にこの制度がスタート。今年で27年が経ちました。

■この制度と他の制度との違いは？

地球緑化センターのような中間組織が存在していることだと思います。受け入れ市町村と協力隊という一対一の場合、意思疎通に課題が生じる場面もあります。そのようなときに双方の話の通訳者として「間」に入る調整役としての存在があることで、活動をより充実させることができると思います。また年間を通じて研修を行うことで隊員としての心構えを学び、同期の隊員との絆を

深めることもできます。年間を通じたバックアップ態勢が、緑のふるさと協力隊の大きな特徴だと思います。

■取材をしていて、隊員、受け入れ自治体、地元住民ともに満足度が高いようです。その理由は何だと思いますか。

一つは、この活動がボランティアだということではないでしょうか。隊員は1年を通じてほとんど無償で様々な活動に取り組みます。それによって自分自身の視野を広げる。そしてこれからの方向性を見出す機会にもなります。また地域の方も、ボランティアで一生懸命に活動している隊員の姿を見て元気になることもあると聞きます。

■この制度をやっている良かったと思ったことは？

地域の人が、歴代の隊員のことを嬉しそうに話しているのを聞くと、それだけ地域に受け入れてもらっていることが伝わります。この事業を続けてきて良かったと思う瞬間です。同じように、隊員たちから「この村に来られて良かった」「協力隊になって良かった」という声を聞くと、こちらも嬉しくなります。隊員と地域、双方に「良かった」と言ってもらえるよう、これからもサポートしていきたいです。

■今後協力隊員として参加される方へのメッセージをお願いします。

慣れない土地で1年間暮らし、活動していくことは、ちょっと勇気がいるかもしれませんが、しかし、その分そこにしかない濃密な経験をすることができます。多くの人と大切な出会いや経験が、きっと自分自身の未来につながると思います。

取材協力/特定非営利活動法人 地球緑化センター



自然の恵みが出会った至宝の一品

柿巻ききゅべし

1,200円(税別)



やすおか 泰阜村はこんなまち

長野県南部に位置する、人口1600人の農山村。面積64.59km²、うち86%を山林が占める。全国的にも珍しい「学校美術館」を小学校に併設し、児童はいつでも300点を超える本物の美術品を鑑賞できる。豊かな自然環境を最大限活用した「自然教育のメッカ」でもあり、年間3500人ほどの視察を受け入れている。村内に信号、コンビニ、国道はないが「秘境駅」が複数あり鉄道愛好家が多く訪れる。



泰阜村柿餅子生産組合
TEL&FAX 0260-25-2008

今回の「うまいもん」は、長野県下伊那郡の生産組合が販売する「柿巻ききゅべし」を紹介します。信州最南端のやすおか村は江戸時代、「南山五百石」と呼ばれる天領だったといわれています。毎年の年貢を山から切り出した材木(くれ木)で納めていました。上納が無事に終わったことを祝い五百石祭(別名くれ木祭)を開催。祭は現在まで続いています。そのころから郷土食として食べられてきたのが「柿餅子」。新鮮な柚子の中にゴマ・クルミ・味噌などを練り込んで作った「五百石ゆべし 柿餅子」は、平成3年度に全国観光土産推奨品として厚生大臣賞を受賞。この柿餅子を芯にして、地域特産の干柿で巻いた自然食品が「柿巻ききゅべし」です。赤い紙箱の蓋

を開けると竹皮に包まれた柿餅子が現れます。1センチ幅にカットしたものを早速頬張ると、最初は干柿特有の自然の甘さに満たされます。噛み進めると、柚子の香りに続いてクルミやゴマの滋味が口中一杯に広がります。どちらかといえば甘いものの苦手な筆者ですが、この柿巻ききゅべしは、二切れ、三切れと手が止まらない。干柿の程よい甘さ、柚子の香り、ゴマやクルミの風味など自然の恵みで構成された上品でバランスの良い味は、記憶に残る美味しさでした。
【文・永井 晃】



●アンケート

- Q1. 面白かった・関心を持った記事はなんですか？
- Q2. 今後取り上げてほしい内容はありますか？
- Q3. お住まいは水源地の里(限界集落)ですか？
またそれに関わらず、地域で解決したい問題があれば教えてください。
- Q4. 水源地の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、『水の源』編集委員会「水の源49号」読者プレゼント係までご応募ください。
【令和3年1月31日(日)消印有効】

※当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた方の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。

読者
プレゼント

柿巻ききゅべし
3名様



本誌に関する
お問い合わせ、
ご連絡先は

▲ 全国水源地の里連絡協議会 『水の源』編集委員会

綾部市役所 定住交流部 定住・地域政策課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL:0773-42-4271 FAX:0773-54-0096 E-mail:teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ

『水の源』を年4回お届けします。※令和2年度は年2回(12月、3月)のみの発行となります。年間購読料500円(送料込)。お申し込みは上記から

地方で実現した オンラインイベント ～企業との連携で奏功～



ひだし
飛騨市 岐阜県

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言、外出自粛要請などにより、人々の生活も大きく変化した今春。さまざまな分野がオンライン化へと進展し、離れた場所でもコミュニケーションが取れるツールとして日本の働き方を変えつつある。

そこで今回は、オンラインによる物産展と移住ツアーを開催した飛騨市を訪れ、地方におけるオンラインイベントについて取材した。

楽天との包括連携協定

訪ねたのは飛騨市役所の企画部地域振興課、対応していただいたのは田中義也課長と上田昌子さん、そして今春のオンラインイベントの立役者である船坂香菜子さんの3人。まずは、一番の疑問「どう

して、そんなにタイムリーに開催できたのか。オンラインのノウハウやスキルはどうしたのか」を質してみた。物産展が3月19日～4月12日、移住ツアーが4月3日と、ネットでの授業や会議が世間一般に普及するよりずっと早い時期に開催している。失礼ながら、オンラ



(左より)地域振興課課長 兼 関係人口係長の田中義也さん、現在も地域振興課で業務に取り組む上田昌子さん、船坂香菜子さん

インに長けた人が飛騨市にいたとも思えない。この問いに笑顔で答えてくれたのは田中課長だった。

「船坂さんは、元、楽天の社員なんです。3年前に、それまで住んでおられた川崎市から、ご主人の実家があるお隣の高山市に移住してこられたんです」

楽天と言えば、日本を拠点にインターネット・ショッピングモールの『楽天市場』をはじめ、インターネットサービス、金融サービス、モバイルサービスなどの多岐にわたるオンライン事業を展開するエキスパート中のエキスパート。なるほど、楽天の社員でノウハウやスキルを持った人が移住してこられたという“偶然”が答えか……と一人で勝手に納得したが、さらに話を聞いていくと単なる偶然ではないことが分かった。

「主人は家業を継ぐために楽天を退職してのUターンでしたが、私は育児休暇中だったので、移住してきたときは楽天の社員のままでした。そして、育児休暇が終わるタイミングで飛騨市に出向することになったのです」との船坂さんの説明に続いて、田中課長が補足する。

「実は、楽天と飛騨市は2016年11月にインターネットを活用した包括連携協定を締結しておりました。そのなかで、ふるさと納税の事業推進のため、船坂さんには楽天に在籍したまま飛騨市に出向とい

うかたちで、18年4月から20年3月の2年間、企画部地域振興課に勤務してもらっていました」

包括連携協定は、インターネットを活用した飛騨市産品の販路拡大や観光誘客の促進、ふるさと納税の推進など10項目において連携していくことになっているが、なかでもユニークなのが『飛騨市ファンクラブ制度』で、会員になると「楽天Edu」機能付きの会員証が発行される。この会員証は全国の店舗で利用でき、利用額の0.1パーセントが楽天から市に寄附される仕組みとなっている。いわゆる『企業版ふるさと納税』の一種で、楽天グループの電子マネー「楽天Edu」を活用した地方自治体のファンクラブ制度の構築は、楽天にとっても初の試みらしい。

「船坂さんに来ていただいてとても助かりました。ふるさと納税では、事業者さんへの営業の仕方からコミュニティの作り方、飛騨市や地元産品の魅力の伝え方や見せ方など横にいてすごくいい勉強をさせていただきました。経験やスキルを持った人がいることがとても心強かったですね」と、一緒に取り組んできた上田さんが振り返る。

これからの時代を見据え、インターネットやIT、通信関連分野を強化すべく飛騨市が楽天株式会社と提携した包括連携協定は、船坂さんと飛騨市を結び付け、一連の

オンラインイベントの大きな伏線となった。

オンライン物産展

「船坂さんに来てもらった18年4月の時点では、ふるさと納税返礼品提供業者の登録数は40社ほどでしたが、2年後には110社にまで増えました」と上田さんが続ける。ふるさと納税の寄附が大幅に伸びた理由としては、ふるさと納税への参加や商品の登録について事業者丁寧に説明してきたことや、ふるさと納税が商品の販路として浸透してきたことが挙げられるという。

「事業者とのつながりもでき、市役所の窓口顔を出してくださる方も増えてきて、会話する時間が多くなっていました。そんな中で、“物産展がコロナ禍で中止になって困っている”“何か良い対策は無いかな”といった相談を受けるようになりました。オンライン物産展のきっかけは、業者の方たちとの“雑談”だったと語る船坂さん。

同市は例年であれば2～3月の時期には名古屋市内で観光物産展を開催しているが、今年は新型コロナの影響で軒並み中止となり、特に食品関係の会社は大打撃を受けていたのだ。

「そんな話を主人にしたところ、“ヒダカラとして協力してみよう”と申し出てくれたので、オンライン物産展を決意しました」

北アルプス連峰や飛騨山脈などの雄大な山々に囲まれた盆地に風情ある街並みが広がる飛騨市古川



2019年12月、名古屋市にある金山駅総合コンコースにて開催された物産展の様子

夫の康祐こうすけさんは実家の家具店を経営する一方で、楽天時代に培ったノウハウを活かして、19年8月に「株式会社ヒダカラ」を設立。飛騨地域を中心とした地域商社やネット通販も支援する業務を展開していた。

開催を決意した船坂さんは上田さんと一緒に市役所地域振興課、同市観光協会、飛騨信用組合、そして株式会社ヒダカラの4者で実行委員会を立ち上げ、「自粛で開催できなな物産展をオンラインでやるんやさ！」と銘打ったオンライン物産展の開催概要を固めた。

「もともと飛騨信用組合さんが業務の一環としてクラウドファンディングを活用した地域の事業者

支援に取り組んでおられたので、購入型クラウドファンディングを活用することにしました。3月19日～4月12日の3週間の開催期間中、460人の方にご購入いただき、目標額100万円を大きく上回り238万円となりました」

すでに広く知られるようになったクラウドファンディングだが、寄付型、購入型、投資型の3つに大別される。今回は資金を投入した人それぞれに、物産展で取り扱われる予定だった品物を発送する購入型とした。

「新型コロナによる外出自粛要請が始まった頃で、消費者の皆さんには、外出できないので自宅で美味しいものを食べたいという気

持ちもあったでしょうけど、お店や事業者を応援したいという気持ちが強かったと思います」と成功の理由を分析する船坂さん。やると決めた以上、二番煎じ三番煎じではダメで、一日でも早く実施する



物産展で販売される飛騨市特産品

ことが重要……との言葉どおり、3月12日の決意から19日のスタートまで準備期間はわずか1週間という異例のスピード。

「企画から実行までの動きがとにかく早いことにびっくりしましたね。行政主体であったら、稟議を上げたりあちこちの部局と調整したりで数か月はかかったでしょう。これも民間で培ってこられたスキルなんだろうなと感心させられました」と田中課長は当時の感想を語った。

オンライン移住ツアー

地域振興課で船坂さんが関わった業務のひとつに関係人口創出があった。「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる人々の数を指し、しばしば、「観光客以上移住者未満」とたとえられる。

「ふるさと納税制度や飛騨市ファンクラブも関係人口創出の施策ですが、それ以外にも、楽天や東京大学、研究者から成る組織で新しい取り組みを進めていました。そうして仕事として関わるようになると、普段から関連情報にアクセスするようになりました。その



新型コロナの影響で外出自粛要請が出されていたので、オンライン移住ツアーは動画や写真を見せながら案内したり、各地の見所となる複数拠点からオンラインで接続するスタイルとなった

ひとつにカヤックさんのオンラインサロンがありました」。オンライン移住ツアー開催について尋ねると、船坂さんはカヤックとのつながりについて話し始めた。

カヤックとは、神奈川県鎌倉市に本社を置くWeb制作・企画・運営会社で、イベントの企画や飲食店の運営なども行っている。同社は、まちづくりに関わる人や関心のある人が継続的に学び、共有し、ステップアップできる場として19年12月にオンラインサロン「地域資本主義サロン」を開設。学ぶことにとどまらず、各地域にヒントを持ち帰り実践すること、そして日本の地域の未来を共につくることを目指している。

「サロンに参加するなかで、当時の私の業務を伝えたところ、カヤックさんが運営するオンライン移住ツアーを飛騨市で実施しないかと、お誘いを受けたのです。ツアーの参加希望者は、プログラムの時間にそのURLにスマートフォンかパソコンからアクセスして参

加します。当日は2400回ほどのアクセスがありました。今でも視聴できますよ」。ツアーが多くメディアに取り上げてもらったり移住に関心のある人たちに観てもらえたりしたことの効果は大きいと語る船坂さん。「外出自粛で人の往来が制限されているのなら、オンラインで実施したらいい」という発想自体は、誰にでもできることだし珍しくもない。大切なのは、周囲の理解や合意を得ながら、それを実現していくことだ。飛騨市のオンラインイベントなど様々な取り組みを仕掛けていくその盛り上がりスピード感は何か。船坂さんの真剣な想いが周囲を動かしたのだろうか。そんな問いかけに対して、言葉を選びながら船坂さんは答えた。

「オンライン移住ツアーを飛騨市で実施したいという具体的なアイデアがあったわけではないんです。でも、様々な人とのつながりやタイミングが重なり、地域を盛り上げられるチャンスがあるならど

んどん乗っけている、という感覚で走っていましたね。やると決まれば、ただひたすらに進めていくだけです」

自治体と企業の連携はお互いにもつ強みを生かしてwinwinの関係で進めていくこと、自分が描いた構想を前面に押し出して周りを巻き込んでいくのではなく、周囲や地域の状況と得意分野を重ね合わせるかを考えていく、そんなスタイルが今は求められているのかもしれない。

【文・竹市直彦】

飛騨市
オンライン
移住ツアー



飛騨市
オンライン
物産展



2年間の飛騨市出向を終え、同時に楽天を退社した船坂さん(右)。20年4月からは(株)ヒダカラの取締役として活動

飛騨市はこんなまち



飛騨市は、岐阜県の最北端に位置する人口23,489人(2020年11月1日現在)のまち。周囲は3,000mを越える飛騨山脈などの山々に囲まれ、総面積792.53㎡の約93%を森林が占めている。年間を通して、平均気温11℃で四季の移り変わりを肌で感じることができ、とても自然に恵まれた地域である。

まちの将来像「みんなが楽しく心豊かに暮らせるまち」を実現するため、政策スローガンである「元気で あんきな 誇りの持てるふるさと飛騨市」のもと、誰一人取り残されず、互いを家族のように支え合えるまちづくりを推進している。



島根県・飯南町
山崎英樹 町長

『生命地域』宣言のまちづくり

飯南町は、島根県の中南部、広島県との県境、中国山地の脊梁部に位置し、標高450mと島根県でも代表的な高原地帯です。北部に大山隠岐国立公園^{さんべさん}、東部に“神秘の花”と呼ばれるサンカヨウが自生する「大万木山」、南部には神戸川の源流地「女亀山」など、周囲を標高1000m前後の山々に囲まれた自然豊かな人口4800人の小さな町です。

主要産業の農業は、神戸川の源流、中国地方最大の江の川支流に広がる農耕地で県下トップクラスの水稲生産を行い、全作付けの80%を「特別栽培米」とする目標を掲げ、都市部の米専門店や高級スーパーなどへも出荷しています。

「生命地域」

本町は、平成17年1月に2つの町が合併して誕生しました。

新町誕生にあたり、まちづくりの基本理念として「小さな田舎からの『生命地域』宣言」を掲げました。これは「飯南町は、いのちを育む源の地、環境の世紀における先進空間であり、飯南町の再生を宣言する」としたものです。

その象徴として、島根県環境保全地域（県内6カ所）に指定されている「赤名湿地性植物群落」と「女亀山」があります。「赤名湿地性植物群落」には、県下最大のハンノキ林と、その林下に寒地性の残存植物と言われるミツガシワや各地の湿地で絶滅しつつあるサギソウなどラン科の植物が自生し、幻のトンボともいわれる体長15mmほどのハッチョウトンボが見られます。「女亀山」は、西日本屈指の大径を誇るブナの自然林が残っており、中国山地唯一のギフチョウの

生息地となっています。

「日本一の大しめ縄」のまち

本町には『出雲国風土記』^{おおくに}に大国主命の琴が納められていると記述されている「琴引山」^{ことびきやま}があります。大国主命は縁結びの神様として有名な出雲大社の御祭神です。その出雲大社「神楽殿」に架けられている長さ13.6m重さ5.2tの巨大な大しめ縄は、日本一の大きさと言われ、本町で制作しています。現在のしめ縄は7代目です。

しめ縄を制作する「大しめなわ創作館」では、全国各地の神社などから依頼を受け、年間を通じて大小さまざまなしめ縄を制作しており、海外でもドバイ、スイスに納めています。

「住みたい田舎」日本一

新町誕生以来「定住対策」を最重要課題として、定住に必要な「仕事」「住まい」に関する相談窓口を一本



化し、さまざまな手立てを講じてきました。「仕事」では、町独自の「農業研修制度」を設け、1年間の研修に助成金を交付。研修後には農地の斡旋や農業ハウスをリースなどの手厚い支援でIターンの新規就農者が増加しています。また「住まい」では、空き家の活用に加え、25年賃借後に借り主の持ち家となるセミオーダー住宅「定住促進賃貸住宅」の建設を進めています。現在多くの子育て世代が利用し、移住者も増加中です。

さらに、第1子から出産祝い金を交付。保育料や給食費の完全無償化。中学3年生までの医療費の無償化などの子育て支援に取り組んでいます。そして、なんととっても本町住民の心優しい町民性はどんな施策にも勝るものであり、その町民性に魅力を感じ移住してくる若者が増えています。

このような取り組みが評価され、宝島社が発行する『田舎暮らしの本』の「2019住みたい田舎ベストランキング・小さなまち部門」では、「子育て世代が住みたい田舎部門」で全国1位に。「若者世代が住みたい田舎部門」では全国3位になりました。

今後も「生命地域」のさまざまな資源を生かし、魅力ある地域づくりを進めていきます。



飯南高校「生命地域学」(赤名湿地性植物群落)



まちの伝統産業(大しめ縄祭り合わせ)

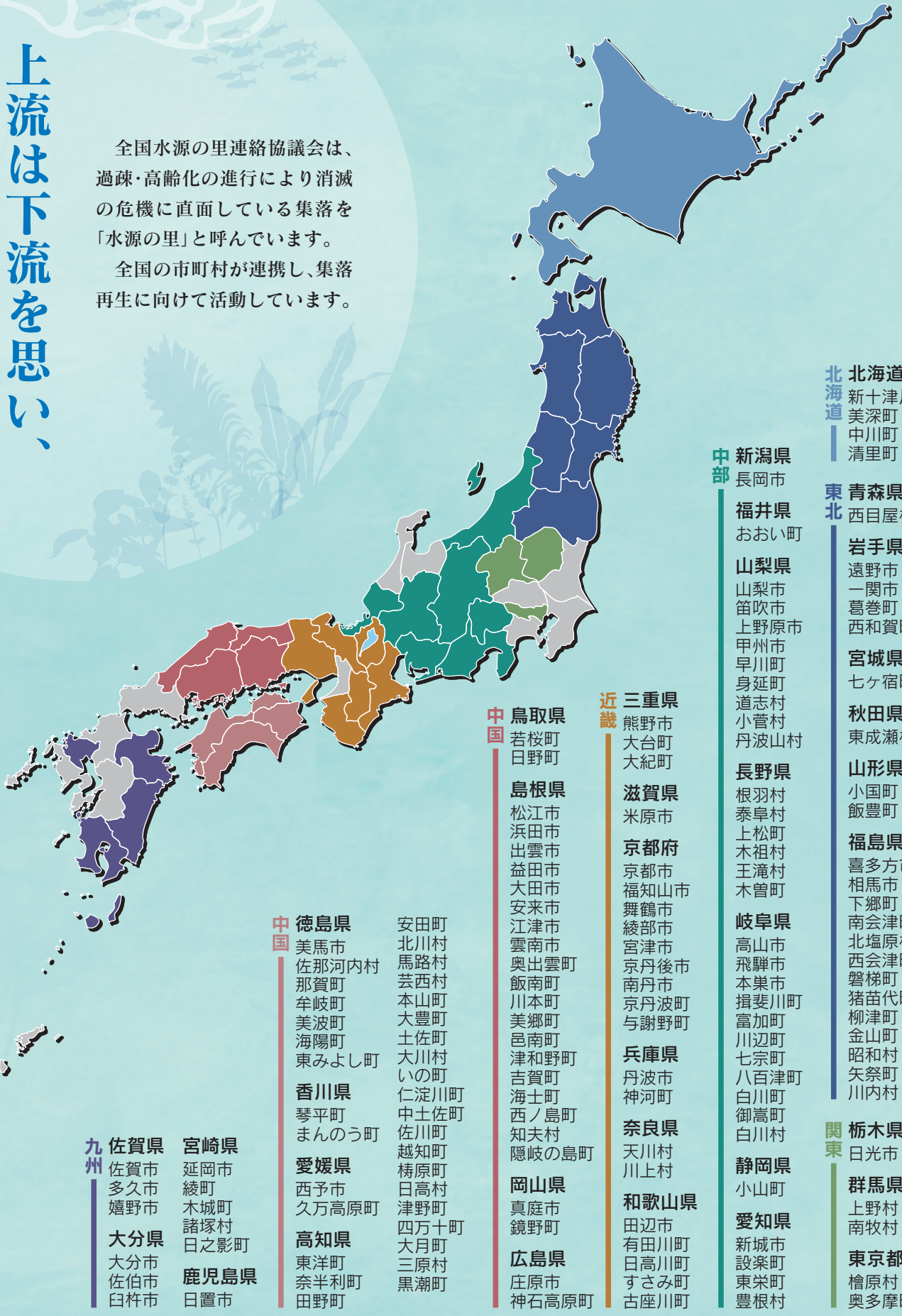


子育て中のお母さんたちが集まる場所(子育て支援センター「ほっと。Café」)

上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、
過疎・高齢化の進行により消滅
の危機に直面している集落を
「水源の里」と呼んでいます。

全国の市町村が連携し、集落
再生に向けて活動しています。



北海道
新十津川町
美深町
中川町
清里町

青森県
西目屋村

岩手県
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

宮城県
七ヶ宿町

秋田県
東成瀬村

山形県
小国町
飯豊町

福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

栃木県
日光市

群馬県
上野村
南牧村

東京都
檜原村
奥多摩町

新潟県
長岡市

福井県
おおい町

山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

長野県
根羽村
泰阜村
上松町
木祖村
王滝村
木曾町

岐阜県
高山市
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
八百津町
白川町
御嵩町
白川村

静岡県
小山町

愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

三重県
熊野市
大台町
大紀町

滋賀県
米原市

京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

兵庫県
丹波市
神河町

奈良県
天川村
川上村

和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

鳥取県
若桜町
日野町

島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

岡山県
真庭市
鏡野町

広島県
庄原市
神石高原町

徳島県
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

香川県
琴平町
まんのう町

愛媛県
西予市
久万高原町

高知県
東洋町
奈半利町
田野町

安田町
北川村
馬路村
芸西村
本山市
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梶原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市

宮崎県
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町

鹿児島県
鹿屋市
日置市

私たちは水源の里を応援します!!

- 全国環境整備事業協同組合連合会
- 電気事業連合会
- 一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
- 独立行政法人 水資源機構
- 全国森林組合連合会
- 公益社団法人 大分県薬剤師会
- 全国農業協同組合連合会